

草の芽句会だより

NO.168

22,8,4

城山のせまりくる蝉時雨かな
城濠の涼しき風の通りかな

貞子

凌霄花風にまかせて垣根超ゆ
蝉の声友呼ぶ声のかき消され

純子

走り雨過ぎてはじまる蝉しぐれ
蝉しぐれ碑に添う松の幹太し

範子

句碑歌碑の続く公園蝉時雨
暑かりし一足先に句座に着く

禮子

しもつけの花の咲き継ぐ狭庭かな
緑陰のベンチに風をひとりじめ

剋子

桔梗ききょうの紋くつきりと着こなして

文子

皿洗ふ水音はげし遠火花

青田風受けて厨の朝仕事

節子

燕去ぬ朝飛び交わす声聞かず

出席者 川原 森 吉崎 馬場 小山
投句者 大黒 氏家



今日も朝から猛暑、城山は降るような蝉時雨である。隣にいるのに大声を出さないと聞こえない。喧しく鳴く蝉に負けじと散策の人たちも声高になる。朝から気温は三十五度。それでも濠からの涼しい風に早々とベンチで休憩。「座ったら動きたくなくなるなあ」「ほんまエライ」「蝉も必死やなあ」——蝉時雨を聞いていたら、亡き寿子先生の言葉を思い出した。まだ俳句を始めたばかりの私に「感動する心を失ったら俳句はできないから、覚えていてね」四十年も前の話である。思い返すに最近、感動することが次第に少なくなっているような気がする。歳を重ね、感性が薄れてきているのかも…と反省しきり。

部屋で冷たいお茶と美味しい「クルミゆべし」を頂く。暑さのせいか出席者は五名だったが、夏を惜しむ蝉時雨に励まされ、いつにも増して賑やかで楽しい八月句会であった。